「多元的古代」研究会・関東

多元 第13号

JUN,1996

TAGEN

発行人◎高田かつ子　編集人◎安藤哲朗　事務局◎〒211 川崎市幸区小倉1-1, I-514 下山昌孝方　TEL 044-522-4185

平成八(九六)年度定期大会

「多元的古代」研究会・関東の定期大会を左記のとおり開催いたします。

日時　平成八（一九九六）年六月二三日（日）　午後一時より

場所　文京区民センター3－C室

議題　昨年度活動経過報告、昨年度会計報告、今年度事業計画、今年度予算計画、その他

なお大会終了後、同室でひきつづき「万葉集と漢文を読む会」定例会を行います。

盛大に　古田武彦氏『送る会』

有志、原語『プラトン全集』など贈呈

晩春の四月二一日、「多元の会」では昭和薬科大学定年退職を機に、京都にもどって学究に専念されるため、十二年に亘る東京生活に終りを告げる古田武彦氏を囲んで懇親の会を催した。

定刻三時よりかなり早く、出席者は続々と来場、会場には猪股満希子氏心尽くしの盛花が華やいで見えた。

会は下山幹事長司会により始まり、次いで高田会長より「さびしくはなりますが、大学教授の束縛を離れて、『「邪馬台国」はなかった』執筆前夜のように白紙に返った心構えで再出発したいという、先生のこころざしを受止めて、拍手をもって前途を祝福申し上げたい」と挨拶、小嶋源四郎幹事発声による壮行の乾杯の後、記念品の贈呈に移り、出席者からの会費の一部・有志の寄付などによる原語（ギリシア語）『プラトン全集』全五冊、古田氏の名入り原稿用箋一千冊（目録）の贈呈が拍手のうちに行われた。その後、古田氏は堰を切ったように新発見の話題に入られた。

（なお主な学術報告は三ページより）

さようなら

―定年退職にさいし
昭薬生に贈る言葉―

古田武彦

一

さらば、若き友よ
わが教え子たちよ
わたしは今、去る
この緑なす学舎（まなびや）を、
深い悲しみと喜びに満ちて。
悲しみとは、あなたたちと別れること、
喜びとは、人生の新しい出発だ。
「老年」という名の黄金期
それを眼前にした、燃え上がる思いだ。
その黄金期の中で
いつ死んでも、悔いることはない。
さようなら

二

あなた方は、幸せだ。
なぜ。
この地球上にエイズが蔓延しているから。
――もちろん、その悲惨さは言いようもない。言葉にも尽くせない。
だからこそ、あなた方は求められている。
一挙に完全治癒の薬か、
痛みを一瞬でも和らげる薬か、
いのちを一日でも伸ばす薬か、
――わたしは知らない。
それとも、患者へのやさしい対応か、
それとも、世界的な発症分布の表の作成か、
それとも、町内の分布のひそやかな把握か、
――わたしは知らない。
いずれにせよ、あなた方は求められている。
期待の眼射（まなざ）しが、あなたに向っている。
あなた方は、幸せだ。
さようなら

三

わたしたちは、幸せだ。
なぜ。
この世界が、民族や宗教や人種の対立で揺（ゆ）れ動いているからだ。
その中で人類は、自信を失ない、生きる目標に迷っている。自律する力をなくしている。
政治家や経済人、そして何より権力者自身が、倫理感と責任感を手放なしてしまった。
こんな世界や
こんな日本だから、
わたしたちは、ここから
逃げ出そうとするか。
この世や
国境からの
脱出を望むか。
否、
わたしは逃げない。
なぜか。
「隣の花は紅い」
のたとえ通り。
「あの世」や
「他国」が
理想郷だなどとは、
わたしは信じない。
もちろん行くときには
堂々と行ってやるさ。
逃げるんじゃない。

四

わたしたちは、幸せだ。
なぜ。
面（つら）を前に向けて生きる。
自分の生き方は、自分で決（き）める。
自分の責任は自分で取る。
他（ほか）がみんな、
そうやらなくたって、おれはおれさ。
自分の倫理を、自分で定める。
キッパリと守りつづけるのだ。
そんな、当り前すぎる生き方が
何となく、恰好いい。
そういう時代、それが今だ。
その今に生きる
あなた方は、幸せだ。
さようなら

五

余計な一言。蛇足（だそく）さ
当り前の生き方をするとき、
かえって、向けられる。
何が。
誹謗と中傷が。攻撃が。
汚れ切った流行の中で
嫉妬に狂った輩（やから）のあがきだ。
かまうこっちゃない。
相手にするな。
それらは、勲章だ。
文化勲章やノーベル賞や
そんなものの、及びもつかぬ
すばらしい、
人間の勲章だ。
有難く、丁重に、
もらっておくんだな。
じゃあな。
いのちがあれば、また会おう。
君たちは、幸せだ。
さようなら

―一九九六、三月十日作―

昭和薬学科大学文芸部『RETO―RT』52掲載原稿。同部の了解をえて転載。

古田氏は出席者に丁重に謝意を表した後、五時間にわたる熱弁を振るわれた。左記はその一部。

「キュリー夫人」の死

この四月の始め、私の大好きだった女の人が亡くなりました。グリア・ガースンというアメリカの女優ですが、この方は私にとって学問上の恩人でした。映画「キュリー夫人」の主役をして、それを私は青年時代に繰り返し観ました。その中でキュリー夫人が夫のピエル・キュリー氏と放射能の実験をしていて、その物質が全体で八単位あるべきなのに、どうしても四単位しか出てこない、どうしてか?と深夜まで苦心して、結局夜中に濾紙について捨てていた物質を測定し直すと、それがまさに四単位あって、夫妻が抱き合って喜ぶ、というクライマックスがあるのですが、それが私の頭の片隅に残っていたと見えまして、勧められていた倭人伝に関する本を書こうか、どうしようかという時期に、倭人伝の行程記事の部分里程を足して総里数（一万二千里）にならないのはなぜか?という問題に取組んで、それを解決した時始めて視野が開け、三国志を信じて研究して見る気になり『「邪馬台国」はなかった』の誕生になるのです。このことは大きな影響を受けていたのにあとで気が付きました。

アマゾンの無土器遺跡

これも最近の新聞が報じたのですが、南米のアマゾンの洞窟の中から非常に古い人類の遺跡が発見されたと報道されていました。一万一千年前の遺跡であって、石器や洞窟の壁画が出ているそうです。

この重要な点は北米よりも古いことで、従来はアジアからベーリング海峡を渡って北米経由で渡来したと考えられていたのが、南米にさらに古い遺跡があった、必ずしもベーリング—北米ルートだという説は成り立たなくなったことにあります。

この記事は通説の立場で書かれていますが、アメリカでも去年こられたメガーズ博士などのグループは海流による直接渡来説を提唱し、それは日本の縄文人である、というテーマなのです。この学派がたくさんの論文を出していまして（MAN ACROSS THE SEA）、その半分を私が訳して出版しました（『倭人も太平洋を渡った』）。多数派がいうような北米から伝播した人類だけではない、ということを示しているのです。

今度発見された遺跡について、いろいろ挙げている中に土器に触れていない。つまり土器はなかったのです。メガーズ博士もアマゾンを盛んに調べた。なぜなら多数派の学者は「アマゾンに北米から伝播した古い種族がいて、土器を使っていたはずだ、それがエクアドルに伝わったのだ」と主張していたからで、メガーズ博士は徹底した調査をして、他の学者が想像でいうアマゾン説を覆したのです。「私はアマゾン領域の専門家です」といっておられました。

先日のミーティングでも、「アマゾン起源説を唱えるなら、その実例を出してご覧なさい」と言われていましたが、日本の学者は直接にはこれを言っていません。日本では「相手にせん」という反応でありまして、具体的に論点を挙げて反論する学者はいませんが、多数派のアマゾン説の意見は伝わっていますから、それをバックにした発言はされています。そういう意味でこの報道は価値があるのです。私はこれを受けて「四柱論証」と名付ける論証をいたしました。（『多元』10号参照）

大河文明は「最後の文明」

われわれは「文明の発祥は大河から」という主題を疑いませんでした。エジプトのナイル文明、中近東のチグリス・ユーフラテス文明と並んで中国では黄河流域から最初の文明が起ったと。しかし私の至った結論では、大河文明はむしろ最後の文明というべきもので、それが完成する前夜には長い前史がある。大河の流域には周辺からさまざまな文明が流れ込んで、それが集大成され、ある時爆発的に発展する、それが大河文明

であって、それ以前には、中国では西域から玉文明、北方から金属文明、江南から稲作文明、そしてそれ以前から、東方からは縄文土器文明が流入して、そういうものが合わせられて一大文明に発展した、これが黄河を中心とした中原の文明なのです。

大恩あるものを蔑む

中国の古代文献がこぞって挙げる「四夷」（東夷・西戎・北狄・南蛮）は、これらの文明をもたらし、中国の黄河文明を形成するのに力あった人びとです。文明の揺籃期に重大な恩恵あたえた種族であることは、現在の考古学・古代史学での常識になっている。さらば東夷は例外であるか？そんなことはない。他の三方に先んじて縄文土器をもたらしたことは、この前で論証しました。土器の存在が基本になって、玉・金属の受容が可能な初期文明が形成されたと考えるべきです（『多元』一〇号参照）。それらの民族に対し獣めいた名をつけてさげすんでいるのは、それだけコンプレックスがあるからと考えられないでしょうか？

このように見てくると記紀に出てくる「土蜘蛛」なども、古代縄文文明圏をあらわす言葉で、決して野蛮な種族ではなかった、という結論に到達するのです。

玉（ぎょく）の輝き

中国の陶磁器の品質は素晴らしいもので、ヨーロッパ人がチャイナといえば陶器のことであるように、中国の代表的な製品です。それに比べると日本産の陶器は粗っぽい感じでこれが中国に先んじて発明されたとは信じられない、という方がいます。

もっともな感じ方ですが、この謎を解くものに『古代玉雕大全』という本がありますが、ここに載せられているのは西から来た玉製品の輝きです。玉の輝きに慣れた中国人が土器の仕上がりに飽き足らず、陶器で再現しようとして、金属器製造に付いて来た高温焼成を応用して、あの白磁・青磁・黒陶などの微妙な製品を作ったのです。つまり西の玉、北の金属、東の土器が合わさって、中国黄河文明の爆発的発展が起こったのです。その結果だけを見て、中国が最初から優れていたとするのはどうでしょうか。

『今回の講話は長時間・多岐にわたりましたので多くを次号以下に譲りました。また前後順が必ずしも進行順と同じではありません』

高橋氏系図と九州年号

多元的古代研究会・九州　平野雅曠

離れていても会員の有難さ、高田会長のご指示とて、網島正嗣氏から、先に催された高橋孝男氏の講演資料のコピーを頂いた。

内容を拝見して、聴講していたら、さぞ有益だったろうと思ったことである。

さて、資料中の『高橋氏系図』から、九州年号のある部分二、三について、簡単な思いつきを述べてみたい。系図中、氏名横の事績部分は訳文にして記した。

○二十九代
孝　倫（春倫）
推古帝に仕えて春の学を勅賜され、号を春倫と改む。天智帝の壬戌年、朝鮮人来りて九国の地を襲う。戦うて大利を得て凱旋す。明年癸亥大唐の乱あり。援兵を我朝に請う。春倫従軍し、百済人と共に戦う。軍功に依り官を拝し、種の字を賜う。
（以下略）

○三十代、高橋氏始祖
長　種
四郎兵庫頭、在筑後三原郡高橋城、孝徳帝より持統帝に至る五朝に歴任す。
白鳳元年五月、大友皇子反逆の時、勅令を奉じて官軍に将として大友皇子を討つ。功に依り筑後国を賜う。
朱鳥四年八月十七日六十五歳卒。

○子・多紀四郎
種　遠
兵庫頭
持統帝に仕え、始めて従五位下に叙さる。五十一歳。朱鳥七年戦功に依り、肥後国を賜わる。和銅六年諸国郡県を定められし時、之に従う。同十六年甲申二月十七日卒、八十六歳。号道休。

先ず、孝倫の事績から始めることにする。

天智帝の壬戌年は、『日本書紀』の天智天皇であるが、朝鮮人が九国の地（九州か）を襲ったという事は、正史にも見えないし、かくれた正史として興味がある。しかし、天智軍がその時、果たして九州に駐屯していたのだろうか。半島出兵のため集結していたことは、有り得ることで

はある。

明年癸亥こそ、おなじみの白村江戦の年であるが、九州年号では、辛酉（六六三）、天智元年にして白鳳元年なのである。

孝倫が出征したのであるから、大和軍も白村江戦に加ったことになろう。

次は長種の部で、白鳳元年とは天武白鳳で、九州年号の壬申年（六七四）、『日本書紀』では天武三年庚戌年に当る。朱鳥四年は、一年差の庚寅（六九一）。「勅令を奉じ」と書かれてはいるが、天武帝はまだ即位していないから、この系図は、ずっと後代に作られたものと思われる。もっとも、各代の記録はあったに違いないが。最後の種遠は朱鳥七癸巳年（六九四）に、肥後国を賜わった、とあるが、熊本の歴史書には、そんな事は一切記載されていない。

従って、これまでの歴史家（みちのくのふひと）は、和銅六年（七一三）道君首名が国司となって、筑後と肥後兼務を命ぜられた以後の事しか知らないのである。

つまり、それ以前の史書は全く消滅している訳である。九州王朝と共に。

（平成八年三月記）

サロン

会員の議論と雑談のページ

寄居末野遺跡発掘調査報告

朝霞市　長井　敬二

埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発掘している秩父郡寄居町末野（すえの）の「末野遺跡」から、七世紀末のものとみられる須恵器（すえき）の硯（すずり）「獣脚硯（じゅうきゃくけん）」が出土した。

一月二十八日、この現地説明会に参加したので報告する。

この時代の獣脚硯の発掘例は、九州・太宰府跡や畿内の藤原京、平城京など、いずれも西日本の六例で、八世紀を含めても十四例だけ、今回の出土で、高い技術による高温焼成の須恵器生産が東日本でも行われ、硯を使った文化が早くからあったことが立証された。

獣脚硯は円面硯の一種で、円形の硯面を支える獅子の足などをモチーフにした飾りのある脚が付いた硯で、古代役所の高級役人や寺院などで使用されたものとみられている。

今回出土した獣脚硯は、一本の足を含む全体の五分の一程度の破片（高さ八・五糎）で、推定完形品は外径約二十六糎、脚十六本とみられる。このほかに円面硯（直径約二十糎）や方形の一辺約十四糎の形象硯とみられる硯の破片が出土している。

遺跡は、道路建設に伴う幅約十二米の掘削による細長い範囲の調査で、約八千五百平方米。古墳時代後期から奈良、平安時代までの約三百五十年間、一貫して須恵器が生産された末野古窯群の一部で、小さい沢筋の斜面を利用した地下式の「登り窯」である。

これまでに粘土採掘跡、工房跡、住居跡、窯跡、燃料の灰と焼き損じの破片を大量に捨てた灰原（はいばら）などが確認され、灰原から今回の硯のほかに、坏（つき）、高台付坏、椀、皿、甕の破片等が出土している。

今回発掘した窯跡は四基で、あと一基は未発掘。三号窯跡は六世紀後半、二号窯跡は七世紀前半、一号窯跡は七世紀代に比定されており、一号窯の長さ十二米、最大幅一・八米の規模や煙道部分が石組みで造られた特殊な構造等、全国的にも貴重な資料といえる。

周囲の状況から同じ沢筋の斜面に、まだ多数の窯跡があると考えられているとのことであった。

探訪

虎塚古墳を見学して

神奈川県城山町　椎橋　重雄

装飾古墳の分布は、福岡県や熊本県の九州地方が中心であるが、古墳文化の中心地である畿内を飛び越えて、東国の常陸、さらに福島県と宮城県の太平洋岸に主として分布している。常陸国風土記にみえる、建借間命（タケカシマノミコト）は北部九州に勢力を張った豪族で、黒潮にのってやって来たともいわれるが、関東を代表する古神社の鹿島神宮とタケカシマノミコト、それと虎塚古墳の主とは密接な関係があるのではないだろうか。

以前、私の知人で地図を見ていたら、伊勢神宮と富士山を結ぶ直線の延長上に鹿島神宮があるといっていたが、常陸国風土記の中で富士山は筑波山と並んで神の山とされているようなので、この配置は単なる偶然とはいい難い気がする。

九州から黒潮にのってやって来た

一族が、その後どうなっていったのか大いに興味がそそられる。
同行の会員八人の方には親しくしていただきまして、とても楽しい史跡探訪の一日でした。

北陸の縄文遺跡を訪ねて

川崎市　下山　昌孝

◆　はじめに

越の国と呼ばれた北陸には、縄文時代からの重要な遺跡が集中している。この連休に、会員の木村桂造氏神山功氏と共に石川県と福井県の遺跡を訪ねたので報告する。

◆　チカモリ遺跡

国の史跡で金沢市にある。縄文後期から晩期にわたる集落で、現在は遺跡公園として整備されている。

ここでは膨大な量の土器や石器と共に、直径七～九十糎もある丸太の柱根四十五点、半割の木柱根二百五十点（全て栗の木）が発掘されている。巨大木柱根が発掘され縄文遺跡としては、能登半島の真脇遺跡が有名だが、それでも丸柱十点、半栽柱、十六点が出土しただけなので、ここの出土物がいかに群を抜いているかが判る。公園には、高さ五米程の半栽柱十本程を円形に並べた木柱列、四本及び六本の円柱を長方形に配置した住居跡が復元されている。吉野ケ里や三内丸山遺跡が発掘されるまでは、単なる巨大木柱列と考えられてきたが、今では高層建築物の建ち並ぶ、町並みを想像させてくれる。

遺跡に隣接して、金沢市の埋蔵文化財収蔵庫があり、出土した柱根、土器、石器などの一部が展示されている。現代では想像する事も出来ない様な太さの栗の木柱根には、溝や穴などが加工されており、縄文人の製作能力の高さを知ることが出来る。

◆　御経塚遺跡

国史跡・野々市町の、チカモリの南二粁程の所にある。やはり縄文後～晩期の大集落遺跡である。現状は遺跡公園として整備され、竪穴住居跡、貯蔵穴等が表示されている他、竪穴住居一棟が復元されている。

配石遺構や巨大木柱列も検出されているが、その配石遺構の内部から、特異な形をした御物石器が出土している。これらは、隣接した野々市町埋蔵文化財収蔵庫で見られる。

◆　白山比咩神社

金沢市の南約二十粁にあり、加賀一の宮で、全国に三千余在る白山神社の本宮である。

御祭神が女神である所を見ると、その起源は縄文時代にまで溯る可能性がありそうだ。御神体は勿論白山そのものだが、最高峰御前峰には奥宮があり、白山比咩大神を祀っている。他に大汝峰と別山が在り（富山県の立山にも同名の峰がある）、大汝峰には出雲神話でおなじみの大巳貴命（おおなむち）を祀っており、出雲と越の深い関係が思い出される。

◆　足羽山古墳群

福井市の中心部にあり、現在、足羽山公園となっている。

越の大王から天皇になった継体天皇の像が建っている山頂古墳からは直弧文を刻む大きな舟形石棺が出土している。

◆　気比神宮

敦賀市にあり、北陸道総鎮守といわれている。現在は日本武尊等仲哀

中小路駿逸先生講演会のお知らせ

◆演題「人麻呂と『日本書紀』
　―古代史誕生の秘密―
七月二八日(日)午後1時30分
（開場は12時）
会場　文京区民センター（予定）
中小路教授には本会発足以来毎年夏に継続して講演をいただいていますが、今回は構想も新たに古代史誕生の秘密に迫ります。
大いにご期待ください。
なお講演会終了後、講師を囲む懇談会（夕食付）を開催致します。
活発な質疑応答が期待されます。
【講師の一言】古代史の姿が「万葉集」の人麻呂の歌と「日本書紀」とはで違っている。これを手がかりに古代史のイメージの誕生の秘密を語ってみたい。
会費　講演会千円（非会員千五百円）
懇親会　千五百円

・応神系の天皇を祀っているが、背後の天筒山は気比の御山といい、古代の磐座（いわくら）と考えられている。境内には敦賀の地名の元となった、「つぬがあらしと」を祀る角鹿神社もあり、古代から大陸と活発印象を与えられた。

◆ ユリ遺跡・北寺遺跡

これも、三方町にあり、早期～後期と中期～後期）のもの。いずれも低湿地帯の遺跡ので、石器や土器の他に豊富な木製品、編み物、種子等を出土している。これらは、町立郷土資料館に展示されている。

◆ 若狭姫神社と若狭彦神社

小浜市にあり、若狭一の宮である。その神域の遠敷川の中流「鵜の瀬」からは、奈良東大寺二月堂のお水取りに使われる水が、毎年献上されている。

◆ 終りに

日本書紀によると、越の国は継体天皇の子孫である斉明天皇の時代になっても、その元年（六五五）及び五年、そして更に和銅二年（七〇九）に至っても、陸奥国蝦夷と共に、越の蝦夷と記されており、大和朝廷の支配下に入ったのは、八世紀以降と考えられる。

東北と共に、輝ける縄文時代を築き、大国主命の出雲の国とも強い結び付きを持って、大和朝廷に反抗を続けた越国に思いを寄せるような旅であった。

多元・関東の秋の『遺跡めぐりの旅』は、この地域も候補に入れて考えています。三方町から見る若狭湾国立公園の三方五湖の景観は素晴らしいもので、歴史探訪に疲れた目を休めることが出来ます。ご期待下さい。　編集部

アラハバキを探す IV

小金井市　鴨下　武之

◇ 相模の国

新編相模国風土記稿（一八四〇）の愛甲郡小野村に、「閑香明神社・村の鎮守なり、【延喜式】に載し小野神社にて、祭神下春命と云……阿羅婆娑枳・春日の二座を相殿とす……」とあり、少なくても、明治維新直前までは、本殿の主祭神は阿羅婆娑枳であったことになる。とすると、下春命がアラハバキであると考えたくなる。

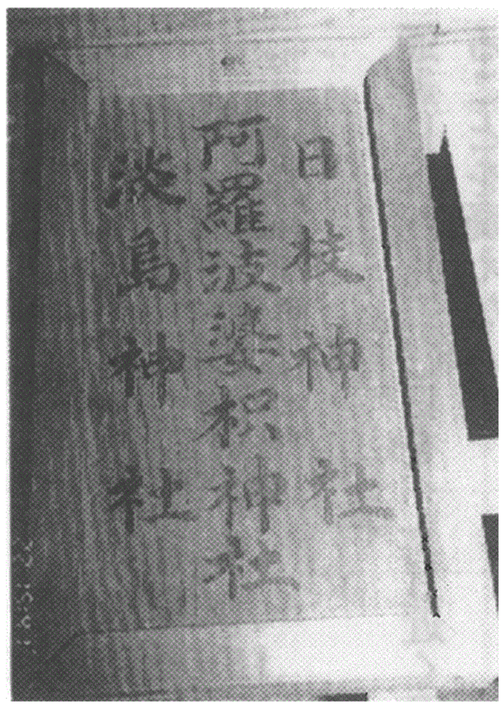
この神社は、現在、厚木市小野。倭名鈔では、愛甲郡玉川郷で、丹沢から発し相模川へ入る玉川のほとりに、小野神社として鎮座している。

神社に曲がる交差点の名前は、小野宮前とあり、格式の高さを伺える拝殿の掲額は「閑香大明神」のままであるが、阿羅婆娑枳社は本殿裏に、末社として、大きな覆屋の中に修められており、七社の中央にあって、一際大きく表示されているのは頼もしい。（写真）

由緒等について、「あそこの家のお年寄りに聞け」と教わり、お年寄りと言って尋ねた相手が、六十歳中頃の方だったので、大変不興を被り「俺は何も知らない、神主なんかもっと知らない」と剣もほろろな有様であった。水害等が何回もあって古文書等は、本当に何もないらしい。

小野神社で思い出すのは、武蔵一之宮社と称する、東京・多摩市の式内社、小野神社でここの祭神も筆頭が「天乃下春命」であった。現在のアラハバキは随神とされているが、「天乃下春命」がアラハバキであった可能性も強い。（多元6号参照）

これらは関東・東北王朝を探る手掛かりになると考えるが、ここは探訪記事なので自論の展開は差し控え、ただ「下春大神は武蔵國造の始祖である」という趣旨を刻んだ石碑が、多摩川の対岸、府中市の一之宮小野宮にあることを紹介するにとどめる。



蛇足だが、相模の小野神社には、玉川をはさんだ対岸の小町山の中腹に、小町神社があり、小野小町を奉っている。小野小町の出生の地から、頼朝の浮気相手の話まで、こちらの方が賑やかな伝承があるらしい。

◇ 甲斐の国

甲斐には天保三年の時点で、富士吉田の淺間神社の随神門にアラハバキと呼ばれる神像があったことが、府中市大国魂神社の猿渡文書で知ることが出来た。（多元6号参照）

甲斐にも江戸後期の地誌に「甲斐国志」（一八一四）がある。

（以下次号）

隋分滅亡と人

＝影山氏の疑問に答える＝

東京都　米田　良三

起

「六月肺出」は法隆寺解体修理工事で金堂の天井板から見付かった落書きのひとつである。肺は彗星を意味しており、六月に彗星が出現したことの記録となっている。

法隆寺が太宰府都城の観世音寺を解体移築したものであること、その観世音寺完成直前の天井鏡板の絵付けの仕事をしていた時期が六一七年頃であることは、『法隆寺は移築された』の中で建築学的に十分に考察したところである。その絵師たちが彗星を見て「六月肺出」と落書きしたと解釈したのである。

一方、周期彗星で過去の記録の残るものはハレー彗星のみである。しかしハレー彗星の出現を何月と特定できる正確な周期は知られておらず、どの書物も約七十六年と記すのみであった。そこで私は独自に周期七十六年と十日を算出し、六一七年六月にハレー彗星が出現したことを見付け出し、仮説としたのである。

もちろん定説は六〇七年と六八四年に出現したとしている。平凡社『大百科辞典』や岩波新書『星の古記録』に記された定説をもとに、六一七年六月は誤っているという指摘が複数の読者からあった。その一人影山氏が引用された岩波新書『星の古記録』所載のハレー彗星の古記録表（以下表Aと呼ぶことにする）が定説とされているものである。

ところで、『法隆寺は移築された』の読者は移築の証明に匹敵するほどに『日本書紀』の記述が虚偽であることを述べていることを知っておられるであろう。また『建築から古代を解く』でも、さらにそのことを深く追及している。ところが定説の表Aの六八四年の記録の出典はよく知られるように『日本書紀』である。私が表Aに疑問を感じることを理解していただけるだろうか。

承

太陽のまわりをまわる惑星、水星、金星、地球、火星……の軌道面を黄道面という。同様に太陽のまわりをまわるハレー彗星の軌道面は黄道面と18度の傾きをもつ。また回転（公転）方向は黄道面の惑星と逆の方向である。地球と太陽の距離は一天文単位というが、ハレー彗星は〇・五天文単位の近日点（太陽に最接近する点）と35天文単位の遠日点を楕円運動する。太陽に近づいて来るハレー彗星は火星の軌道の外で黄道面を通過し、近日点に向う。近日点の前後二ケ月ほどは太陽の近くにあるため地球上からは見えない。そして再び姿をあらわし、黄道面を通過して離れてゆく。ちょっと考えると近日点通過の前後に必ず二回の観察が可能なように思われるが、地球と彗星の周期が整数比でないため、黄道面通過の時に地球が太陽の反対側にあって、地球からハレー彗星が見えない場合があるのだ。例えば一九一〇年の場合は太陽から離れてゆく状態のみが観測されている。表Aにはその近日点通過日を一九一〇年四月二〇日としている。しかし、同月二六日からの写真記録があり、この近日点通過日は近すぎ、誤りだ思われる。

先に述べたようにハレー彗星は地球から見て、近日点通過日から一ヶ月は昼間の太陽の光の中にあり、観測出来ないのである。正しい近日点通過日は四月二〇日を一ヶ月近く遡ることを疑えない。

同様に他の近日点通過日も観測記録をもとに計算されたもので、正確な周期が判かっていない点を考えても疑問とせざるを得ないのである。

観測記録として確かなものは最近のハレー彗星が太陽に近づき肉眼で観測できた一九八五年十二月である。もうひとつは、ジオットがパドバの

ハレー彗星近日点通過日	記録のある国名
B.C. 240 Ⅲ 30.5	中国（史記・秦始皇7年）
〃 163 Ⅰ 20.0	中国（漢書・文帝後2年）
〃 87 Ⅷ 2.5	中国（漢書・武帝後元2年）
〃 12 Ⅹ 5.5	中国（漢書評林・元延元年）
A.D. 66 Ⅰ 26.5	中国（続漢書・永平9年）
〃 141 Ⅲ 20.0	中国（続漢書・永和6年）
〃 218 Ⅴ 17.5	中国（同上・建安23年），ギリシャ
〃 295 Ⅳ 20.5	中国（晋書・元康5年）
〃 374 Ⅱ 16.0	中国（同上・寧康2年）
〃 451 Ⅵ 24.5	中国（宋書・元嘉28年）
〃 530 Ⅸ 25.2	中国（魏書・永安3年），ヨーロッパ（？）
〃 607 Ⅲ 13.0	中国（隋書・大業3年）
〃 684 Ⅸ 28.5	日本（日本書紀），中国，ドイツ
〃 760 Ⅴ 22.5	中国，ヨーロッパ
〃 837 Ⅱ 27.5	日本（続日本後紀），中国，ヨーロッパ
〃 912 Ⅶ 9.5	日本（日本紀略），中国
〃 989 Ⅸ 9.0	日本（同上），中国，朝鮮
〃 1066 Ⅲ 23.8	日本（扶桑略記），中国，朝鮮，ヨーロッパ
〃 1145 Ⅳ 22.0	日本（本朝世紀），中国，朝鮮，ヨーロッパ
〃 1222 Ⅹ 1.5	日本（吾妻鏡），中国，朝鮮，ヨーロッパ
〃 1301 Ⅹ 23.38	日本（北条九代記），中国，朝鮮，アイスランド
〃 1378 Ⅺ 9.02	日本（愚管記），中国，朝鮮
〃 1456 Ⅵ 9.1	日本（師郷記），中国，朝鮮，イタリア（？）
〃 1531 Ⅷ 25.8	日本（公卿補任），中国，朝鮮，ヨーロッパ
〃 1607 Ⅹ 27.56*	日本（同上），中国，朝鮮，ヨーロッパ
〃 1682 Ⅸ 15.27*	日本（尭恕法親王記），中国，朝鮮，ヨーロッパ
〃 1759 Ⅲ 13.05*	日本（本朝天文志），中国，朝鮮，ヨーロッパ
〃 1835 Ⅺ 16.44*	日本（新修曆星法），中国，朝鮮，ヨーロッパ
〃 1910 Ⅳ 20.18*	世界各国
〃 (1986 Ⅱ 9.67*)	予想

＊はグレゴリオ暦日，他はユリウス暦日で示す．

―表A―　斉藤国治著
『星の古記録』（岩波新書）より

スクロベニ礼拝堂の「東方三博士の礼拝」という壁画に描いている彗星で、一三〇一年九月十五日から四十五日間あらわれたものである（太陽に近づいてくる時に見えたものと仮定して話を進める）。表Aからこの間ハレー彗星は九周していることがわかり、次のように七十六年十日が周期と計算できる。

1985年12月－1301年9月＝684年90日

684年90日 ÷ 9＝76年10日

ジオットが見た一三〇一年九月から、九周分の六八四年九〇日を溯ると六一七年六月となるのである。

また表AはBC二四〇年まで溯る記録だが、それ以前に太陽に回帰しなかっただろうか。私にはBC三五〇〇～BC二〇〇〇年の三内丸山人がハレー彗星を見なかったとは思えないのである。ニュートンの理論通り天体は正確に悠久の運動を行っていると考えるべきだろう。

転

その後『隋書』天文志に彗星の記録があることを知った。『隋書』は隋の滅亡後、唐の第二代の帝王太宗の勅によりつくられた正史である。隋滅亡直後につくられた同時代史料といえる。隋の時代に現れた彗星の記録が次の①～④である。星孛、長星はともに今の天文学でいう彗星を見掛け上で呼び分けた名である。

①開皇十四年（五九四）十一月癸未、有彗星孛于虚危及……

②（大業）三年（六〇七）三月辛亥、長星見西方、……至九月辛未、転見南方、……経歳乃滅。占曰：「去穢布新、天所以去無道、……兵大起、国大乱而亡。」

天 18(102)　天　文

周

番号	彗星名	周期(年)	T (TT)	q
115	Kowal-Mrkos	9.24	1991 7 19.0	2.667
116	Shoemaker-Levy 2	9.28	1990 [illegible]	[illegible]
117	Helin-Lawrence			
118	[illegible]		69.6	1956
	Brorsen-Metcalf		70.5	1989
157	Pons-Brooks		70.9	1954
158	Halley		74.7	2061
159	de Vico		76.3	1846
160	Bradfield 2		81.9	1988
161	Vaisala 2		85.4	1942
162	Swift-Tuttle		135.	1992
163	Mellish		145.	1917
164	Bradfield 1		151.	1983
165	Herschel-Rigollet		155.	1939

**) この小惑星には1989年，コマが検出されたので，周

***) 小惑星4015番(1979VA)としても登録されている

『理科年表』1994年版「周期彗星」

③（大業）十一年（六一五）六月、有星孛于文昌東南、長五六寸、……占曰「為急兵。」

④（大業）十三年（六一七）六月、有星孛于太微五帝座、色黄赤、長三四尺所、数日而滅。占曰；「有亡国、有殺君。」明年三月、宇文化及等殺帝也。

②は表Aがハレー彗星とした六〇七年の彗星の記録である。また私が指摘した六一七年のハレー彗星の記録が④である。「六月肺出」と同様に六月に現れたことを記し、「国が滅び、君が殺される」と占われたとし、翌年三月に宇文化及等が帝を殺したと記している。隋の滅亡である

隋の煬帝は運河を開いたり、宮殿を築いたりしたため、国民は重税に苦しんでいた。そこに彗星が現われ。その占いに出たとおりに臣下の宇文化及等に殺されたのである。

正史にこれほど明らさまに記した、のは、天がその命令を下すために彗星を出現させたと強調することにあったのではないか。天命であったことで、後に立った唐王朝存在の正統性を主張できたのではないか。このように考えると彗星出現は唐の国民のほとんどが知っている正確な事実であったと考えられるのである。

結

六〇七年の彗星がハレー彗星か、六一七年の彗星がそうかを明らかにするのは、天文学者の仕事である。また、岩波書店や平凡社は『星の古記録』や『大百科辞典』のハレー彗星に関する項目を発表すべきである。国立天文台編の『理科年表』は理科学全体のデータをコンパクトにまとめたデータベースであるが、ことに最初にある「暦部」「天文部」は専門の学者も依拠する信頼度を誇るものである。ところがこの「周期彗星」表に変な現象が起こっている。ハレー彗星の周期を、以前は七六・四年とし、一九九三・四年版では七四・七年とし、一九九五・六年版では七六・〇年としている。これはいかにも腑に落ちない。七六年もある彗星周期が数年のうちに激しく変わるわけもなく、単なる誤植でもないことは、世界一有名なこの彗星の周期を誤って発表するとは、巻頭に麗々しく並べられた監修者の名を持ち出すまでもなく、有り得ない。してみれば、この彗星の周期の算出方法は、案外確定していないのかも知れぬ。ともあれ国立天文台はこのいきさつを発表すべきである。

また、人工衛星ジオット号など現代科学技術を総動員して行われた一九八五、六年のハレー彗星の観測結果をやさしく解説して公表すべきである。

天文学はコペルニクス、ケプラー、ガリレオ、ニュートン、ハレーと偉大な科学者が貢献して来た歴史がある。現代の天文学者が科学者として、自覚を持って答えられることを願うのである。　一九九六年五月六日

山田宗睦 日本書紀講座

第一七回

高天原神話の成立時期は？

第七段の本文に進む。この本文と三つの一書は高天原におけるスサノヲの乱暴、アマテラスの雲隠れ、アマノウズメの踊り、アマテラスの復活、スサノヲの追放という有名な箇所であり、高天原神話のハイライトといえる。注目されるのは、ここの叙述が問わず語りに洩らしている高天原神話の成立時期（大和における）、それとこの頃の農業事情であろう。

誓ひ（うけい）に勝ったスサノヲは高天原でアマテラスに対して何故か無茶をする。アマテラスの田圃に春には重ねて種を蒔き、畦を壊す。秋にはまだら毛の馬を田圃に放り込む。これらの行為は当時の基準ではすべて重大な犯罪である。アマテラスは怒って天石窟に籠もってしまい、国中が真っ暗闇になってしまう。ここで見逃せないのは、この段が当時の農業、特に稲作、水田耕作の資料になっていることである。アマテラスは天狭田（アマノサナダ）・長田という自分の田をもっている。サナダは神様の稲を作る田の意で、固有名詞である。固有名詞であることは、田というものがまだ珍しい時代であったことを物語る。また、ここでは新嘗、大嘗の区別がない。持統以後には両者の区別がはっきりしてくる。換言すれば、大和では高天原神話は北九州の原型を受け継ぐ形で持統天皇時代に成立したことが推測される。これはまたアマノウズメとともに中臣氏の始祖アマノコヤネ、忌部氏の始祖フトタマが登場することからもうかがえる。中臣氏、忌部氏とも新しい氏族であり、部民制を反映する氏族である。部民制については成立や実態に関して議論の余地は多いが、通説に従って六世紀の成立としても、ここへ中臣氏、忌部氏が登場してくるのは不思議な話である。天皇家中心の体制が整ってきたことの反映である。高天原の話は大和の地上の話が天上に反映されているのである。ここでも大和における高天原神話の成立時期は新しいことが確認される。さらに、磐戸に隠れたアマテラスを引き出すために集まったのはオモヒカネ、タチカラヲといった意味のよく分かる神であることもここの話の新しさを示す。神様の名前は訳の分からぬ、複雑なものほど古いといえるからだ。アマノコヤネとフトタマは真坂樹の上の枝に玉、下の枝に鏡を懸けるとあるが、剣を欠いている。三種の宝器ではないことに注目したい。三種の宝器は大和のものではないことが分かる部分である。

＊　＊　＊　＊

今回、改めて本文を読んでみて、ハイライトの部分にしては分量が少ないことに驚いた。古事記の印象とゴッチャになっていたようだ。我ながら恥ずかしく思った次第である。また、農業事情については、古島敏雄「土地に刻まれた歴史」を紹介され、日本の歴史における田圃の意味を感慨深く説かれた。以前、一読した記憶があったが、何の印象も残っておらず、再度挑戦してみようと思った。話の延長線上で出てきた伊勢神宮、諏訪神社、安曇野の天蚕の話なども興味深く、今後の楽しみにしたい。

（木村由紀雄・記）

◆第三年度「日本書紀講座」

山田宗睦氏の「日本書紀講座」は九月八日(日)の第19回より第三年度に入ります。

山田氏はすでに現代語訳『日本書紀』（教育社新書）を上梓されていますが、今年から全三〇巻の『日本書紀・史注』（仮題・風人社刊）を発行すべく精力的に準備を進めておられます。講座の方は巻第一をじっくり読み進めておりまして、本年度も年間八回の講座とし継続します。引き続き多数の方のご参加をお待ちします。

会費（年間）八千円・非会員一万円（一回参加）千五百円

活動報告

富永　長三

三月例会

三月は、かながわ考古学財団の砂田佳弘氏をお招きして「よくわかる考古学」と題したお話を伺った。

現在を溯る四〇〇万年の昔、アフリカ東部オルドヴァイの地に始まる人類の歴史。猿から人間へ。猿人、原人、旧人そして現生人類へ。その間わたしたちの祖先は石器という道具を残してきた。適当な大きさの石の一部を打ち欠いた礫器。その後打ち欠いた剥片を調整加工して石器とした時代。さらに石核から連続して剥片を打ち欠いて同じような形の石器を作る石刃技法を生み出した。その石刃技法には、東日本で行われた湧別技法。西日本での瀬戸内技法の二通りがあった。すでに旧石器時代に東西の違いが表われている。

またこれらの石器は当然ながら用途によって様々な形があった。たたく、割る、掘るための打製石斧。切る、刺すなどのナイフ形石器。削る切るなどの削器。掻き取るための掻器。彫る、刻むための彫器。割るための楔形石器等々、またその材質は頁岩、チャート、サヌカイト、黒曜石等々多様であり、それらが地域ごとに特徴的に用いられた。また同質の石材であっても産地を特定出来るようになってきた。その産地を求めることにより石器の流通、生産地、消費地もわかる。また一つの石核から次々と打ち欠いた剥片どうしを接合することによってもとの原石が復元できる場合がある。こうして人の移動、ひいてはその社会の姿の一端を描くことも可能となってきた。

またこれら遺跡の年代判定に火山灰が大きな役割をはたす。二四〇〇〇年の昔、鹿児島湾、姶良カルデラの大爆発による火山灰が北海道を除く日本列島を覆う。これによって各地の遺跡の前後関係が明確になる。等々お話は盛りだくさんであった。

持参された石と鹿の角で実際に石器づくり実演を交え、スライドも見せていただいて時間一杯の楽しい時間であった。

四月例会

今月は下山昌孝氏のエジプト、その他中東の遺跡と博物館を見学された報告と問題提起。富永の神奈川の遺跡展、見学報告の二点であった。

下山氏のお話は、わたしたちが見聞する機会の少ない、興味深いものでしたが、紙面の都合もあって割愛させていただきました。以下富永報告の一部です。

本年二月、神奈川県立埋蔵文化財センターにおいて、平成七年度かながわの遺跡展「謎の敷石住居」と、合せてパネルデスカッション「敷石住居の謎に迫る」が開催された。

「敷石住居」とは「床に石を敷いた住居」であり、その形は円、または方形の一部に張出を持つ。その張出部は時代と共に発達し変化して行く。また敷石も床全体に敷くもの、一部だけのものとがある。さらに敷石はないが形が敷石住居と同形の、柄のついた鏡（柄鏡）の形に似ている柄鏡形住居と呼ばれるものがある。これも含めて「柄鏡形（敷石）住居址」という呼称も提案されている。

これら敷石住居址は中部地方から関東山地寄りの丘陵を中心として東北地方に及ぶ地域。敷石のない柄鏡形住居は大宮台地や下総台地北西部に見られる。時代は縄文中期後半から後期後半に終る。

また敷石住居址が大正一三年に発見されて以来その性格について議論が重ねられてきた。

まずこれが住居か否か。次に住居とすれば一般的なものか特殊なものなのか。特殊説は石棒等の祭祀的遺物に注目する説であり、一般説は日常用具の出土に注目し、また一部落に複数存在することに重点を置く説である。（以上遺跡展パンフを省略紹介してきた。正確にはパンフによって確認下さい。）

万葉集と漢文を読む会

「海原の　根柔小菅　あまたあれば　君は忘らす　われ忘るれや」

この歌と『古事記』の須勢理毘売の歌、

「八千矛の　神の命や　吾が大国主　汝こそは　男にいませば　打ち見る島の崎々　掻き見る磯の崎落ちず　若草の嬬持たしめ　吾はもよ　女にしあれば…」

と同類の歌ではないか、港々の根柔小菅（女性）を経巡る君（大国主のごとき王者であろう）に対する女性の歌と取るのはどうか、と問うたら、賛否にぎやかであった。東歌の世界は山や丘ばかりではない。豊かな内海、霞ヶ浦もある。そこを経巡る海辺の王者、その彼らの祖先達が眠るのが霞ヶ浦周辺の古墳では、等々連想させられるのだが……。

【講演会ご案内】

◆演題「虎塚古墳の発掘について」
七月七日(日)午後1時
講師　鴨志田篤二氏
（ひたちなか市埋蔵文化財センター）
会場　文京区民センター
茨城県勝田市にある虎塚古墳は、関東にある装飾古墳として有名です。本会でも四月一三日に見学会を実施しましたが、発掘調査を担当された鴨志田篤二氏（ひたちなか市埋蔵文化財センター）に講演をお願いしました。

【展覧会のお知らせ】

「日本の史籍」
天理ギャラリー第一〇三回展
場所　東京都千代田区神田錦町七―九
東京天理会館9階
電話　03　3292―7025

「日本の古文書」「日本の小記録」につづく、日本史籍シリーズの第三回。
奈良時代から江戸時代につづく、四〇点の展示。古事記・日本書紀などが集められています。
入場無料、10AM～06PM

事務局便り

新規のご入会を歓迎します

「多元の会・関東」にご参加下さい
本会は「古田武彦氏の提唱された、歴史を多元的に観る考え方に賛同し、それを継承発展させる事を理念として、日本の古代の真実の姿を研究」する会です。このような取組方針に賛同する方々の入会を歓迎します。本会は隔月に機関誌を、中間月にはハガキ通信を発行する一方、各種の月例会を開催し、また年間数回は外部講師を招いての講演会、遺跡調査旅行などを実施しております。
▼入会ご希望の方は、住所・氏名（ふりがな）電話番号明記の上、入会金（千円）および年会費（四千円）を左記へお振込願います。
▼（郵便振替）「多元的古代」研究会関東
▼口座番号00170・9・768777

◆新年度会費納入のお願い
会費の納入はお済みですか？
本会の年会費は「四月より翌年三月まで」となっています。継続会員の方でまだ平成八年の年会費（四千円）を払込みの済んでいない方は早急に郵便振替にてお振込みされるようにお願いいたします。
＊（振込先）「多元的古代」研究会・関東
口座番号00170・9・768777

多元の会カレンダー

会場は全て文京区民センターです

6月

2日(日)午後1時
発表と懇談の会　話題提供とテーマは
青山富士夫氏　「人麿の妻・依羅娘子考」
富永長三氏　「三国志倭人伝に見る塞曹掾史の周辺について」
斉藤里喜代　「記紀の成立について」

◆9日(日)午後1時30分
山田宗睦氏「**日本書紀講座**」　巻第1（神代上）第7段より。
（7～8月は休講です）
◆23日(日)午後1時より
平成8年度定期大会
◆23日(日)午後3時
万葉集と漢文を読む会
今回は定期大会終了後、万葉集（巻第14〈東歌〉）のみ、参加者による回読・研究を行います。

7月

7日(日)1時30分
講演会鴨志田篤二氏（ひたちなか市埋蔵文化財センター）
演題「虎塚古墳の発掘について」
7・8月の山田氏「**日本書紀講座**」は休講です。次回は9月15日(日)の予定
◆28日(日)午後1時~~30分~~（開場は~~1~~2時）
講演会中小路駿逸氏（追手門学院大学教授）
演題「人麻呂と『日本書紀』」
―古代史誕生の秘密―
講演会終了後、講師を囲む懇談会（夕食付）
◆万葉集と漢文を読む会は重複のため休会。

●当会へのご連絡は、会長／高田かつ子 TEL 048（881）9111　〒336 浦和市南浦和3-19-2-303　事務局／下山昌孝 TEL 044（522）4185

FROM 編集室

▼このたび青山富士夫氏の後を引き継いで編集を担当することになりました。まあ正直なところ、どうにか原稿を紙面にはめ込むのがやっと、という感じで、今まで青山氏が（クロートとはいうものの）どれ程苦労されたかがよく分かりました。富永氏・鴨下氏（このひとは毎日が日曜で）に全面的に援助をいただいています。
▼こんかいは米田良三氏の労作をいただきました。理科的な論文のいいところは、自分で検証（という程の事でもないか！）しながら読めることです。もちろん歴史の論文もまったくそのとおりなのですが。
▼会員の皆さんの原稿を（以前からズーッとそうだったのですが）お待ちしています。なにも常連の人たちのようにうまく書けない、などという心配はご無用です。あるアイディアを書いて一つのまとまったものに仕上げて行く、という行為は、はまってしまうと「こんな楽しい作業があったのか」というほどのものです。それなら自分でやればいいじゃないかって？それをいわれるのが一番つらいのですが……
▼ご承知とは思いますが、この紙面ではどこにでもあるやさしい言葉で語れるのが（多少厳密性に欠けていても）一番エライのです。古田先生のエライところもそこにあると思います。（哲朗誠惶誠恐、謹言）